

佛陀最後の教誡（長阿含經に よる研究）

武 田 海 正

一、みたまゝの社會

どうもこの頃は不景氣で因るね。伊エ戦争が、あちらでちやんばらをやれば日本は黄金の洪水だ。黄金の奔流で生活苦を綺麗さつぱりと流してしまへ。第一金がないと首がまわらん。運動資金のない奴は首まですつとんでしまふ世の中だ。地獄のさたも金次第かハハハ。

君はいくつだい。失禮だわ。女の年などきくなんて、昨日のシャンも今日の梅干か。いゝわよ。それでシャンのつもりかい。へい。ヤカン頭。こりや電氣代を儉約する爲にわざ／＼磨いてあるんだ。女をおだてるには若いと云ふに限るよ。男だつて老人にみられるのはどうかと思ふよ。してみると皆んな老苦が嫌ひなんだね。

地震、雷火事親爺といふが、世の中で病氣が一番おつかないよ。金はかゝるし、家内中じめ／＼するし、悪化すればたちまち死の淵へつきおとされるんだもの。

生活苦も老苦も病苦もつらいにはつらいが死ぬよりはましだらう。シヲを波の花といつたり、ショウユを紫といつたり、ナシを有りの實なんていふのは皆んなシを恐れる恐怖心が作つた幻影だよ。電話番号の四番を嫌つたり、病院に四號室がないのは皆シを恐れる證據だ。

世は流線型のスピード時代になつても生活苦と老苦と病苦と死苦から、解放する秘法はないのか、ある。大いにある。

る。たゞ現代人は物質文化に心酔してそれを求めない。求めないから與へられないのである。

二、現實苦を救ふ教

佛陀の四門出遊は何を意味するか。若きシツタルターはそこで生老病死の苦相をまざく〜とみせつけられた。その時如何にすればこの生老病死を解脱する事ができるか、早くこの苦縛から解脱したいといふ、求道心が炎々として太子の心燈に輝いたのである。遂にその大理想は三十五才の時實現した。伽耶菩提樹下の金剛寶座に冥想をこらした太子が、二月八日の朝まだき靜かに瞳を開かれると、はるか曙の空には曉の明星がキラ〜と輝いてゐた。丁度曉の明星の光が無邊の彼方へ光達する様に、覺りの心は全法界を照徹した。無始以來の無明の闇幕は切りおとされて、本覺の天地萬象は光明にみち〜と輝きわたつた。

その光は先づ太子をすてゝハラナイに去つた五比丘を焼灼した。それから今日まで二千五百有餘年、何億萬人の人々がこの光にうたれて死縛から脱れた事か。今や佛陀の教は三世の光として世界第一の宗教として生きてゐる。

佛陀は科學者でもなく、倫理學者でもない。中阿含經の箭喻經はよくそれを物語つてゐる。或る日佛陀はマクラマラ比丘の質問——世界は常住か否か、有限か無限か、靈魂は身体と別か同か、死後は有るか無いか——に對して答へ玉はず、直ちに毒箭の喩を擧げて教へられた。

毒矢に射られた人が、若しその矢を抜いてくれる人に、

私はその矢を射た者が男か女か、どこの人かどんな顔の人か、又その弓は大きい小さいか、その弦は蔓か糸か、その矢は竹か、葦か、羽根は鷺か鷹か、その鏃は馬蹄形か槍形か、等を研究して皆んなわからぬ中はこの矢を抜か

せぬ。と云つてゐるなら、その男は矢を抜かぬ前に死ぬであらう。

私が宇宙問題等を説明しなければ修行しないと云ふなら、汝等は修行もせず覺りも聞かぬ前に死ぬだらう。理窟で宇宙がわかつても生老病死は遠慮なく襲つて来る。私は現實苦を除くために法をとくのである。

佛陀は煩瑣な理論より單純なる實際、迂遠なる宇宙理論より近き人間の日常生活に逼つて来る生老病死の苦を除かんとして無盡の教を説かれたのである。佛陀が社會の人々の生老病死の苦に憐んでゐるのを見ていたく哀れに思ひ、それを救済する爲に説法された實例は一切經中に山積されてゐる。しかし今問題にしようとするのは佛陀自身が自分で生老病死に遇つた時の態度である。私共佛徒たる者は何よりもさきにそれが聞きたい。そうして私共自身のそれ等の苦に對する態度としたい。

佛陀もやつぱり人間であつた。老病死の魔は何んの遠慮もなく逼つた。それは佛陀が少年の頃四門出遊のをり初めて見たそれであつた。昨日は人の身の上、今日は吾身の上、佛陀としても感慨無量であつたに相違ない。

今これを最も古い層を有すると云はれてゐる長部遊行經によつて研究してみやう。

三、佛陀最後の教誡

一

夏安居中佛陀は背の痛い病氣になつた。その時、佛は今こゝで涅槃してはならぬ。弟子達も多く集まつて居らないから、力めて壽命をのべておこう、と思つた。そうして阿難に申さるゝよう。

我已に老たり。年は八十。故車の方便修治して至るが如し。吾身も亦然り。佛の方便力を以つて少らく壽を留めん。

我已に老ひたりといふ言葉の中には無限の味がある。人間釋迦としての過去の追憶、覺者としての解脫境。色々な立場から意味深長である。八十老比丘の胸中を往來したものは流るゝまゝに八十年。赤道直下を東奔西走してひたすら迷へる魂を救はんが爲に布教傳道に夜を日についだ過去の思出であつたらう。みれば自分の肉体はこわれかけた古い車だ。しかしこの車は長い間よく私を乗せて働いてくれた。今に有限なる幻の肉車から、無限の彼方へ解放されるであらう。だがしかし方便力を以つて暫く壽命を留めねばならぬ。

こゝで方便力と云ふのは念力、もしくは生命本然の神秘力といふようなものである。その念力、法力を以つてもう暫くこの肉体的壽命をのべようと、いふのである。

こゝに佛教が世界の宗教として、永遠に人類と共にある根本生命が存するのである。佛陀は單なる倫理運動家ではない。今死にのぞんでもつと生きよう。永遠に生きようとする生命本然の叫びこそ久遠の生命の躍動であり、人類を常闇の地獄から救ひ出す唯一の光である。連文に、

一切の相を念ぜざる無相定に入れば我身安穩にして惱患ある事なし。

とある。前の引文を老苦に對する解決とすればこれは病苦の解決である。

病氣發生の根本原因は何のであるか、それは汝自身の心である。先づ心が病んで漸々に肉体が病むのである。心が病むから肉体が病むと云ふならば、佛が背痛を病んだのも心が病んだからであるか。その通りだ。佛が病相を現するのは多くの人々を病氣の苦海から救はんが爲である。

唯摩經には菩薩の病氣は大慈悲心から起る。佛の病氣は衆生救済の爲である。衆生が病むから私も亦病むのであると説かれてゐる。肉体の健康不健康、環境の善惡等は皆んな心が化作するのである。だから玄義には心の幻師は一日

夜に於て常に種々の衆生、種々の五陰、種々の國土を造るとあり、止觀には三界には別の法なし。唯これ一心の作なり。心は工なる畫師の種々の色を造るが如しとある。これ等の文によれば肉体も環境も我が心の化作した幻の城に過ぎない。

さて本文の無相定に入るといふのは無我の境地に入つて、心が虚空の如くに全法界に漲り、過去久遠、未來永恒にわたつて自由自在なる事を得るをいふのである。さうした無相定の妙境に入ると肉身も環境もあるのか無いのか分別をゆるさぬ状態になるのである。だから病氣の身をも、健康の体をも超脱してしまうのである。病相一切を超脱する事によつて病痛等一切の苦痛を解脱する事ができるのである。病痛を解脱すれば病氣や苦痛が、全々消滅してしまうから、眞体は安樂になり、悩みや苦しみや患がなくなるのは當然であらねばならぬ。迷へる人々は病痛苦惱にせめられてゐる時も、覺れる佛は病苦をすでに解脱してゐるのである。衆生は劫盡きて大火にやかるゝとみる時も我がこの土は安穩にして天人常に充滿せりといふ壽量品の文もこの思想を表現したものである。

この文に次いでいよく佛最後の教誡が宣言せられる。

阿難よ。當に自らを熾燃とし、法を熾燃とすべし。他を熾燃とすること勿れ。自らに歸依し、法に歸依せよ。他に歸依する事勿れ。

自らを熾燃とせよといふのは、自らの覺りの心をともしびとせよと云ふ事である。自らの心とは内なる佛の覺りを指すのであるから、その覺りの心をともしびとして、覺りの火をかくげよと仰せられたものである。覺りの心とは本來覺了の久遠の生命であるから、いくら燃しても盡きると云ふ事はないのである。もやせば燃す程世の中が明るくなるばかりである。その炎々たる覺りの火は燎原の火の如く人類の迷ひの雜草を焼き盡さなければやまぬであらう。迷

へる雜草が覺りの炎によつて燃えさかるならば、その燃ゆる火によつて千古の無明の闇は一瞬の間に消滅するであらう。さうして迷ひの雜草が灰燼に歸した時、初めて覺りの新芽が常春の日光を浴びて萌え出づるであらう。

法を熾燃とすべしと云ふのはこの内なる覺りの心の火を益々熾ならしめる爲に、釋迦の説かれた覺りの教の油をそゝげといふ事である。釋迦佛は生老病死等の現實苦解脱の爲に無量無盡の法門を説かれたのである。

迷つてゐる人々は自分と云ふものは生老病死四苦八苦の器だと思つてゐる。

覺つてみれば自己の内なる佛は老もしなければ死にもしないのである。本來本有不老不死なのである。内なる覺りの心は生活苦に悩んだり、病痛を患つたりしない。内なる覺りの心は本覺の佛であるから、無限の富の所有者であり永遠に病まぬ金剛不壞身をもつてをり、不老不死の永遠の生命をもつてゐるのである。

無限の富の所有者であるならば日常の經濟的生活苦は即座に解決するであらう。永久に老ひぬものであるならば老苦はたちどころに消え失せるであらう。永遠に病まぬ金剛身ならば現前の病痛もたちまち消失して絶對健康の樂しみを味ふ事ができるであらう。いつまでもいつまでも死なゝい永遠の生命に生きるならばそのまゝ死苦を解脱する事ができるであらう。私共はたゞ内なる佛の覺りを開き、外なる佛の覺りの教を信解する事によつてのみ、生活苦と、老苦と、病苦と、死苦とから解放されるのである。

他を熾燃とする勿れと云ふのは自らの内なる佛の覺りの光によつてのみ、無始以來の無明の闇が消滅して一切の業障から解脱できる。この内なる佛の覺りの他には本當に自己を救済してくれる何ものもないのであるから、他に依頼してはならぬと云ふのである。

自らに歸依し、法に歸依せよ、他に歸依する事勿れとは、自己の内なる佛に歸依し、現身佛の説かれたる覺りの教

法に歸依せよ。その他の一切の人法は迷人邪法であるから歸依してはならぬと云ふのである。これが佛陀の最後の教誡であつた。

これによつてみると本來佛教は極めて自力的なものであつたようである。たゞこゝで注意しなければならぬのは、自力と云つても迷ひのまゝの凡夫の自力ではなく、佛智で清められ、法力を加被せられた自力だといふ事である。だから人間禮拜と云つてもたゞの迷ひの凡夫を禮拜するのではない。こちらから佛眼を以つて迷へる人々を光被して、その己心に佛性なり、本佛なりを認めて禮拜するのである。

二

佛陀それ自身が自己の死に直面した時には一体どんな態度をとつたのであらう。死に對する佛陀の堂々たる態度は經典に躍如としてあらわれてゐるが、文を出せば長くなるから要約してみよう。

佛陀は自燈明の教誡をおわつて申さるゝよう。

阿難よ、私はこれから尙一劫有餘この世に生き長らへて居つて、大慈悲の光明を放ち、世の迷ひの闇をのぞき、人々に利益を與へようと思ふ。

と三度同じ言葉をくりかへされたが阿難はその意味を覺る事ができなかったたので黙つてゐた。そこで佛は更に三度まで色々暗示を與へたけれども、阿難は佛にどうぞ生き長らへて下さいと請ひ願はなかつた。その時佛は、

阿難よ、去つて靜かに考へよ。と命ぜられた。阿難が座をたつてしまうと、そこへ惡魔が現れて佛に涅槃せよとすゝめる。佛は嚴然として宣言された。去れ惡魔よ。佛は自ら時を知つてゐる。今日から三ヶ月の後、クシナーラで入滅するであらう。

その時阿難は佛の御前に禮拜して申し上げるよう。

どうぞもう一劫の間生きて居つて下さい。そうして私共のような迷へる人々に利益を與へて下さい。

佛はいつになく莊重に答へ給うよう。私は前にもう一劫の間生きて居つて世の人々に利益を與へようと、三度重ねて云つたではないか。それから更に三度まで暗示を與へたではないか。その時なぜ生き長らへよと、請はなかつた。言葉の意味がわからなかつたら、二度でも三度でも聞けばよかつた。今ではもうおそい。すでに三ヶ月後入滅すると宣言してしまつた。佛の言葉は神聖である。佛に二言はない。言つた通り實行するのである。

この經説によつてみると、佛陀は全く生死を超越してゐたのである。生死を超越すると云ふのは生きるも死ぬるも自己の思ひのまゝに自由自在であると云ふ境地に到達した事を言ふのである。自己の生死は自己の自由意志のまゝになる事である。佛は覺りを開いてゐるから、生きるも死ぬるも自己の思ひのまゝになるのである。だから一劫有餘生きようと思へば生きられるし、三ヶ月の後死のうと思へば死ぬるのである。佛がもう一劫の間、生きてゐたいと仰せられた時、阿難がどうぞ生きてゐて下さいと、請願すればきつと佛は生きてゐたに相違ない。阿難はまだ覺りを開く事ができないで迷つてゐたから、佛も壽命がくると人間なみに死ぬものであると心ひそかに思つたのであらう。その阿難の迷ひの心を經説では惡魔と云つてゐるようである。

それから未羅の人々が佛の病氣を見舞に來てゐた。佛はその人々に申さるゝよう。

遠路御見舞に來て下さつて御苦勞であつた。皆さんの定命をのばしてあげよう。病氣にはかゝらぬようにしてやらう。若し病人があるならばすぐ療してやる。

佛陀は何んの力を以つて壽命をのばしたり、病氣を療したりしたのであらう。それは佛の覺りの力である。覺りを

開いてみれば自己の身体も、法界の森羅万象も皆んな意識から顯現したものに外ならない。意識から現れたものであるならば、その意識を滅すれば皆んな滅してしまうのである。またこれに反してその意識を生かすならば皆んな生々化育する事疑ひないのである。

佛は多くの人々に

識滅すれば余も亦滅す

と教へてゐる。識が滅すれば現象もまた滅すると云ふ思想は恐らく佛陀の全生涯を支配した思想であらう。

佛陀はこの識縁起の思想を以つて、彼の少年時代からの懸案であつた生老病死の現實苦を解決したのである。覺りを開いた人が、若し壽命をのばさうと思ふならば壽命をのばしてあげようと祈念する識の力によつて、その人の壽命は必ずのびるのである。又病氣を療してやると祈念するならば、その病氣はたちどころに療るのである。

覺りの念力で經濟生活を豊富にして生活苦をのぞき、病氣を療し、老を留め、死の恐怖から解放されるならば、人間はどれくらい幸福な生活を送る事ができるかわからない。こゝに初めて此土寂光の大理想が實現するのである。

かく信解する事によつて全佛教は生きて現代の物質文明に心酔せる精神病者を救ひ、一切經は生きて全人類を生老病死の現實苦から救済するのである。

引用文は正藏第一卷長阿含經及國譯一切經長阿含經による。